

V 日高振興局

1. ウスイエンドウの現地実証ほで生育状況調査を実施

農業水産振興課では、ハウスウスイの省力的な安定生産を図るため、草丈を抑えられる「みなべ短節間1号」の導入に向けた取組を進めている。平成27年12月にみなべ町の大野光男氏のほ場で発見された「みなべ短節間1号」は、従来品種の「きしゅううすい」よりも節間が短く草丈の低いのが特長であり、平成31年3月に出願公表された。本品種を導入により従来品種と比べ、収穫等の作業負担の軽減が期待されている。

令和元年度は、管内3か所に現地実証ほを設定し、JA紀州、県農、暖地園芸センター、振興局からなる日高野菜花き技術者協議会（大野隆之会長）が、これまで9回調査を行ってきた。今後も栽培終了まで調査を実施する。

また、令和2年度においても、「みなべ短節間1号」の品種特性に応じた栽培技術の確立と普及性を確認するため、引き続き調査を継続する。



みなべ短節間1号の現地実証ほ場
(左: みなべ短節間1号 右: きしゅううすい)

生育状況調査(12月11日)

2. スターチスの種苗費削減に繋がる育苗技術の現地実証

農業水産振興課では、スターチスの種苗費削減による産地の強化に取り組んでおり、その一環として、日高野菜花き技術者協議会（以下、協議会）と協力して暖地園芸センターが開発した常温育苗技術*1の現地実証を行っている。今年度は、御坊市に2カ所の実証ほを設置し、県育成の「紀州ファインラベンダー」と「紀州ファインバイオレット」について固化培地*2を利用した常温育苗苗とポリポットによるクーラー育苗苗の切り花本数を調査した。

3月10日に協議会花き部会で現地検討会を実施したところ、常温育苗でもクーラー育苗と同等以上の切り花が得られることを確認できた。一方、出席者からは今年の結果だけでなく、複数年の結果を確認したうえで普及に移すべきとの慎重な意見もあった。引き続き、現地実証を続けて生産者への周知に努めるとともに、実際に常温育苗を行う際の技術的な要点

を明らかにして普及に移していきたい。

*1：無加温雨よけ施設のもとで空調設備などを使わず、成り行き気温条件で育苗すること

*2：ポリエステル繊維や不織布などで培土を崩れないように成型した培地



実証ほにおける現地検討会（3月10日）